

氏 名	寺 尾 元 延
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博乙第 4128 号
学位授与の日付	平成18年6月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	Diagnosis of deep vein thrombosis after operation for fracture of the proximal femur: comparative study of ultrasonography and venography (大腿骨近位部骨折術後の深部静脈血栓症の検討 —下肢静脈エコーと上行性静脈造影との比較—)
論文審査委員	教授 金澤 右 教授 大塚 愛二 助教授 草野 研吾

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

今回われわれは手術を施行した大腿骨近位部骨折患者に対してほぼ同時に上行性下肢静脈造影と血管超音波検査をおこない深部静脈血栓症の発生率を調査し、超音波検査の診断能を評価、検討したので報告する。対象は2002年3月から2003年12月までに手術を施行した大腿骨近位部骨折75例である。術前、術後D-dimer TAT FDPなどの推移を調査し、術後7日目に上行性静脈造影と血管超音波検査をほぼ同時に施行した。結果は静脈造影で75例中DVTが認められたのは46例、61.3%であった。DVT陽性群とDVT陰性群で比較すると、統計学的有意差はなかったがDVT陽性群で手術時間、待機期間が長い傾向にあった。術後7日目のD-dimer値を $10\mu\text{g/ml}$ でcut off lineとすると静脈造影の結果でSensitivity95.5%、Specificity91.4%であった。DVTでのエコーによる診断率はSensitivity78.3%、Specificity96.5%であり、膝窩部より近位部において正診率は94.4%で、遠位部では73.6%であった。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は、大腿骨骨折術後の深部静脈血栓症を下肢静脈超音波検査と直接静脈造影を比較して行ったものである。その結果、超音波検査は肺塞栓症を発生する危険性の高い膝下部より近位の血栓診断においては、静脈造影と同等の診断能を有することと、術後7日目のD-dimer値が $10\mu\text{g/ml}$ 以上の症例に対して超音波検査をすることで、より選択的で非侵襲的診断が可能となることが示された。従来 of 報告に加え、新たな深部静脈血栓症管理の方向を示した業績であると認められる。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があることを認める。